

第 13 冊

『平安京はいらなかった』

～古代の夢を喰らう中世～

桃崎有一郎、吉川弘文館、2016年
(上)

いらなかった？平安京

ある本屋で、この本を手にとった時、思わず「平安京がいない?!」「どういうこと?」って、口走ってしまいました。「これは読まなあかん」と思って読み始めたのが、今回取り上げる桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』(吉川弘文館)です。

『平安京はいらなかった』の「帯」にあるのが次の言葉です。

「使いにくい平安京は何のためにある?もてあます朝廷、捨てたがる法皇、破壊する住民」

このフレーズは著者の言いたいことを端的に表していると思います。京都に住んでいる私としては複雑な思いをしますが、藤原京や平城京などと比較しながら、『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』で書かれてあることを、お伝えしていきたいです。

それでは、まず著者である桃崎有一郎氏の略歴を紹介しておきましょう。

1978年、東京都にお生まれになり、2001年、慶應義塾大学文学部を卒業されました。ということは、まだ40代前半とお若い先生ですから、これから、どんどんご活躍されると思います。2007年、慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位を取得された、史学博士です。現在は、高千穂大学商学部の教授をつとめておられます。

次に、主な編著書を紹介しておきます。

『中世京都の空間構造と礼節体系』（思文閣出版、2010年）

「建武政権論」（『岩波講座日本歴史 第7巻 中世2』岩波書店、2014年）

『室町政権の首府構想と京都』（共編著、文理閣、2016年）

『室町幕府将軍列伝』（榎原雅治・清水克行編（担当:分担執筆、範囲:足利義嗣）、戎光祥出版 2017年）

『武士の起源を解きあかす：混血する古代、創発される中世』（筑摩書房 2018年）

『幻想の京都モデル』中世学研究会編（担当:分担執筆、範囲:鎌倉幕府の成立と“京都文化”誕生のパラドックス—文化的多核化のインパクト—）、高志書院 2018年）

『日本法史から何がみえるか』（高谷知佳・小石川裕介編著（担当:分担執筆、範囲:第一部第一章「古代における法と礼」、第一部第四章「中世における法と礼」）、有斐閣 2018年） など



藤原京・平城京・平安京

平安京ができる前には藤原京や平城京がありましたね。

日本で初めての都城制に基づく都が藤原京でした。西暦694年から710年までの16年間、日本の都となりました。

遷都した時の天皇は誰でしたか？

そう、持統天皇でしたね。天武天皇の皇后であり、文武天皇の祖母になります。

藤原京では、三代の天皇が即位しました。三代の天皇とは誰でしょうか？

初代は持統、続いて文武、そして最後が元明天皇でした。文武天皇以外は女帝ですね。

藤原京の前の都（宮）は、どこでしたか？

飛鳥浄御原（あすかきよみはら）宮でしたね。

ところで、藤原京とか飛鳥浄御原宮とか言いますが、アンダーラインを引いた「京」と「宮」の違いって何でしょうか？

「宮」とは「宮城」のことで、「大内裏」とも言います。宮の内部には天皇の居住空間である「内裏」や大極殿（だいくでん）、朝堂院（ちょうどういん）、豊楽院（ぶらくいん）など政治の中枢機関が置かれていました。ちなみに、大極殿とは政治や儀式が行われる場所、朝堂院は役人や貴族が集まる場所、豊楽院は大規模な饗宴が行われた場所です。今の日本で言えば、皇居と国会議事堂と霞ヶ関の官庁街ですね。奈良で整備されている「平城宮跡」は、この宮に該当します。

それに対して、「京」とは「都全体」を意味し、王族や貴族も天皇のもとに集住し、一般の人も住んでいる町並みも含めて都全体のことをいいます。江戸時代で言えば、城＝宮、城下町＝京っていう感じですかね。

また、藤原「宮」ですが、はじめて大極殿・朝堂院の建物に、礎石の上に柱を立てて屋根に瓦を葺いた大陸風の最新の建築技法が取り入れられました。ただし、天皇の居所である内裏については、藤原宮も平城宮も平安宮も、伝統的な掘っ立て柱の技法で建てられ続けました。

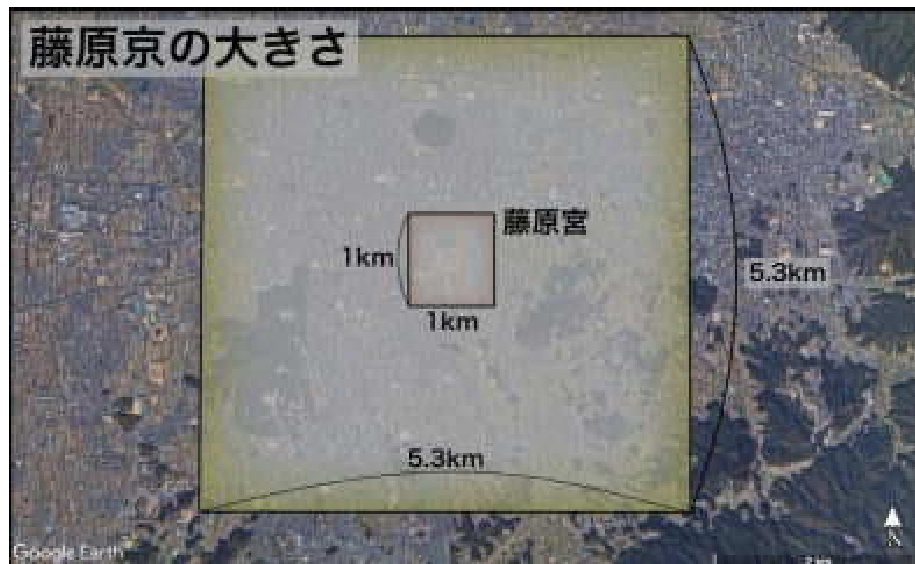
さて、ここからは、藤原京や平城京との比較をしながら、平安京の特徴をおさえていきましょう。

まずは、**大きさの違い**です。そこで、あなたに質問です。**藤原京・平城京・平安京のなかで、面積が最大のはどれでしょうか。三択で教えてください。**

①藤原京

②平城京

③平安京



※写真はホームページ『日本の城 Japan - Castle』より
<https://japan-castle.website/japanese/history/tojo/>

答えは、「藤原京」です。藤原京は平城京や平安京を超える古代の最大規模の都市だったのです。

私が教師になった頃（1980年代）、藤原京は大和三山（耳成山、畝傍山、天香具山）の内側にあり、面積はこれほど大きくなかったと考えられていました。藤原宮が平城京や平安京と同じように、京域の北側にあると考えられていたのです。ところが発掘調査が進んでいくと、どんどん北側に遺構が見つかったのですね。

上に地図を載せてあります（『日本の城 Japan - Castle』より引用）。**藤原京**は縦（南北）5.3km、横（東西）5.3kmの「正方形」です。なお、藤原京には外敵防衛の機能はなく、都を囲む城壁や正門が存在しませんでした。

それに対して、**平城京**は縦（南北）4.8km、横（東西）4.3kmです。ただし、京域の北東側には外京がありますので、その部分を含めると6.3kmあります。

平城京への遷都が行われた時の天皇は誰でしたか？

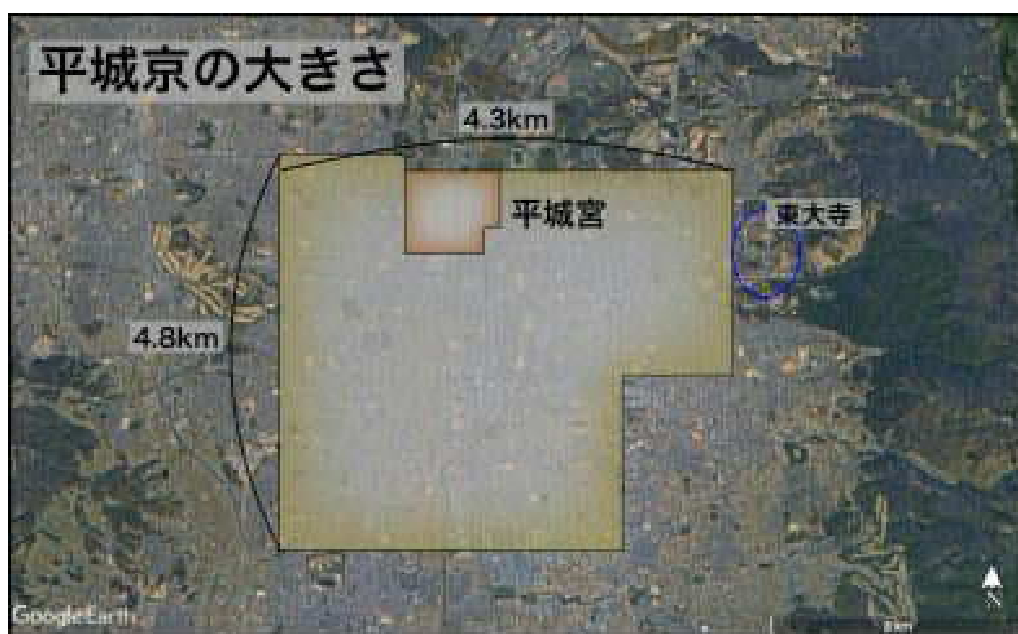
そう、**元明天皇**ですね。元明天皇から、元正、聖武、孝謙、淳仁、称徳、光仁と続き、桓武天皇が長岡京に遷都しました。

ところで、**聖武天皇が藤原広嗣の乱を契機に都を次々と移動させます。さて、その都となった場所はどこでしょうか？**

恭仁京、難波宮、紫香樂宮でしたね。

さあ、**平安京**はどうでしょうか？ 縦（南北）が5.2km、横（東西）4.5kmです。

したがって、大きい方から言うと、**藤原京→平安京→平城京**の順番になります。



※写真はホームページ『日本の城 Japan - Castle』より

次に**形の違い**です。

藤原京は「正方形」ですよね。それに対して**平城京も平安京も縦長の「長方形」**になっています。

しかも、「宮」（大内裏）の位置が、**藤原宮は正方形の「真ん中」**に造られているのに対して、**平城宮も平安宮も長方形の北側**に設置されています。

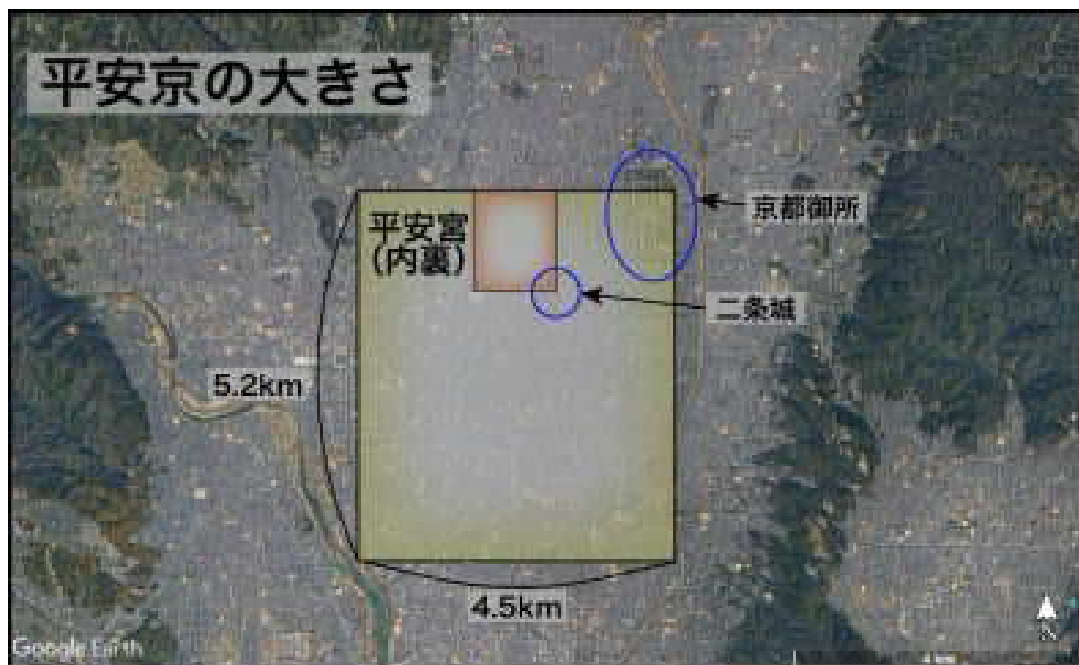
なお、宮が、藤原京のような真ん中にあるものを「**中央宮闕（きゅうけつ）型**」、平城京や平安京のように「**北闕（ほっけつ）型**」と呼びます。

さらに言えば、平城京は「北辺坊」と呼ばれる「出っ張り」があったり、「外京」(げきょう)と呼ばれる広大な「出っ張り」があります。そして、この「外京」こそが、現在の奈良の中心街ですね。

さて、今度は**共通点**です。

藤原京も平城京も平安京も、「宮」は南向きに建てられています。いわゆる「天子、南面す」という形を踏襲していますね。

また、上記の写真ではわかりませんが、京の真ん中を貫く「朱雀大路」をすべて持っています。ただし、藤原京の場合は「大路」と言いながら東西の二坊大路の方が大きな(幅の広い)道です。その点、平城京の朱雀大路や平安京のそれは、京域の中で最も幅の大きい道路でした。



※写真はホームページ『日本の城 Japan - Castle』より

さらに、これらの京、都市は「都城制」に基づいて建築されています。**日本最初の都城制に基づく都市が藤原京**でしたね。

都城制って何でしょうか？

都城とは、元々は中国で造られた「城」に囲まれた「都市」のことです。中国最初の統一王朝である秦の始皇帝が咸陽城の規模を拡大して、大都城を造り上げました。その後の王朝は、首都である市域全体を**城＝城壁＝羅城**で囲む大都市を建設しました。

そして、都城の形は宮城から南に向かって朱雀大路が通り、それを境にして「右京」と「左京」に分けられ、「碁盤の目のような街」になります。京都は「碁盤の目のような街」と言われますが、まさに都城だったのですね。

都を囲まない「羅城」

日本の都城制のモデルはもちろん中国です。そのあたりのことを、[桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』](#)では、どのように説明されているのか、見てみましょう。

[中国の都城は原則として周囲を羅城で囲み、外敵の襲来を防いだ。その形態は巨大な城塞そのものである。](#)

[中国では「城」とは軍事的な防御機能を持つ集住地であって、元来は「都」と同じもので、だから日本のミヤコにあたる都市を「都城」といった。中国では、「都」「城」に住むことは文明人の証である。「城」は、移住を繰り返す遊牧民の「野蛮さ」の対極にある、「文明的な」中国人の定住地を意味した。中国では遙か古代以来、「城郭」に民衆を安全に住まわせることが、聖なる王の責務であった。](#)

[そして、しばしば異民族や外国の侵略に晒される中国特有の事情のため、「都」「城」は防壁で囲まれることになった。そのため、中国の都城を「長安城」「洛陽城」などと呼ぶ・・・・・・・・・・](#)

「羅城」とは都城を囲む「城壁」です。

羅城とは、異民族から襲撃された場合に備えた「防御」のための「巨大な壁」「城壁」です。

以前、中国を訪れた時に、北京郊外にある**「万里の長城」**を見てきました。英語では**「The Great Wall」**と言います。確かに、「偉大」だし「凄い」し、「よくこんなものを造ったな」と感嘆しました。





万里の長城

さらに、**紫禁城**に行った時には、またまたびっくりさせられました。紫禁城が完璧に羅城（城壁）で囲まれていたからです。それも城壁が幾重にも造られていました。

所々に**羅城門**がありますが、そこを通ると羅城（城壁）の「厚み」に気づきます。厚いところでは城壁の厚みが20mくらいあるのです。万里の長城でも私が訪れたところでは、少なくとも5mほどの厚みがありました。

厚みだけではありません。羅城（城壁）の凄いのは、高さです。少なくとも10mほどありました。万里の長城でも場所によっては5m前後から10mほどありました。

なぜ、そんな大規模な羅城＝城壁を築かなければならなかったのでしょうか？

それは、主に**北方からの騎馬民族の襲撃に備えるため**でした。襲撃してくる人数も多いでしょうし、騎馬で凄いスピードで攻めてくる異民族から都を防御するためには、びくともしない大規模な城壁が必要だということで、あんな大規模な城壁＝羅城を造ったんですね。

下記に西安（長安）の城壁の写真を掲載させてもらいましたが、車や人物の大きさから城壁の大きさが想像できると思います。

長安は平城京や平安京のモデルとされていますが、碁盤の目状の道路、南北を貫く大通り、北の政庁の位置、河川の配置といった特徴は大変似ています。

大きな違いは、平安京など日本の都は長安城と異なり、羅城門の左右を除いて城壁が設置されなかったことです。日本は中国と違って、北方騎馬民族の襲来に備える必要がなかったからです。



※写真はホームページ『日本の城 Japan - Castle』より

もう一度言います。「羅城」とは都城を囲む「城壁」です。しかし、日本の羅城は中国の羅城とはまったく似ても似つかないものでした。中国の羅城をモデルにしたけれども、まったく異なるものを造ってしまったのです。

桃崎有一郎氏は、次のように説明されています。

しかし、それは中国の羅城とは似て非なる、というより似ても似つかぬ、名ばかりの継承に過ぎなかった。……つまり、平安京の羅城は南辺の九条大路に沿って存在したが、北辺の一条大路、東辺の東京極大路、西辺の西京極大路には存在しなかった。本来の中国式の都城ならば四方にあって都城を囲むはずの羅城が、平安京では南側にしかなかったのである。

その羅城の中央に設けられたのが、平安京の正面門というべき羅城門である。……。都（都城）を意味する「城」は「セイ」と訓（よ）まれた。羅城門も当時は「ラセイモン」と訓まれ、芥川龍之介が羅城門を題材にした小説で門の名を「羅生門」と改変したのも、元をたどるとこの訓みに由来するらしい。

この羅城門は九条大路と朱雀大路の交差点、つまり平安京南端の中心にある。しかし、羅城門は文字通り「羅城に設けられた門」を意味する普通名詞だ。したがって、東西南北の四方を羅城に囲まれた都城なら、東西南北のそれぞれに羅城門があってもよい。それにもかかわらず、南辺の一つの門だけが「羅城門」と呼ばれ、それが固有名詞として扱われてきた。それは、都の南辺にしか羅城が存在しなかった証左である。平安京の周囲を羅城が取り囲んだ痕跡は、文献上にも考古学的にも存在しない。

・・・平城京でも、羅城門の面脇の一坊分（四町分）しか羅城がなかったことが考古学的に確かめられており、その前の藤原京では、京の南辺が丘陵部にかかるため、そもそも羅城門・羅城が存在しなかった。中国の都城と異なり、平安京を含む日本の都城は、外部に対して丸裸であった。そして中国を模倣した条坊制は藤原京に始まるのだから、日本では最初から、都に羅城を構えるという発想を切り捨てていたことになる。

「北辺の一条大路、東辺の東京極大路、西辺の西京極大路」とあるのは、それぞれ平安京の北限・南限・東限をさす道路で、それぞれ一条大路、九条大路、東京極大路のことです。ちなみに東京極大路とは現在の「新京極通」にほぼ該当します。

なお、一条大路・東京極大路（と西京極大路）は幅十丈（約30m）、九条大路は幅十二丈（約36m）の幅を持った道路でした。けっこう大きい道路ですよ。

もう少し、[桃崎有一郎氏](#)の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』から続けましょう。

平安京とその外部を区画する線は、全く存在しなかったわけではない。左京では一条大路の北に土塁があり、右京では一条の北に大規模な濠（北野廃寺の南側）が、また東京極大路の東にも大規模な堀が発見されている。・・・しかし、それらの土塁は幅・高さとともに非常に小さく、文字通り区画するための線であった。

・・・『延喜式』によれば、平安京南端の羅城は「垣」（築地）であった。前述のように、垣は破壊が容易で、比較的頻繁に自然崩壊を起こす土塀であり、中国の石造りの羅城とは強度、つまり防御性能が比較にならない。平安京の羅城は京域を取り囲みもせず、わずかに造った南側の羅城も、戦争時にその気になれば簡単に破壊できる貧弱な土塀であった。ならば、平安京の羅城に防御性能は期待されておらず、そもそも藤原京以来の日本の都城には外敵の侵入を物理的に防ぐ発想がなく、それでさしたる不都合がないと、設計者・運用者は信じたのである。

平安京とその外とを区画する囲いが全くなかったわけではないのです。ただ、中国のような羅城（城壁）ではなく、泥土を突き固めて造った塀である築地塀（ついじべい）や京域の内と外とを区切る人工的な溝である区画溝がありました。

[桃崎有一郎氏](#)が語るのは平安京についてですが、藤原京や平城京では、どうだったのでしょうか？

藤原宮は、ほぼ1km四方の正方形で、周囲を高さ5.5mの塀で囲んでいました。東西南北の塀にはそれぞれ3カ所、全部で12カ所に門が設置されていました。さらに、その周りに堀を設けていました。

平城京では、京域を囲む城壁を築いていませんが、南辺に高さ5mの塀と、幅3.6mの堀を設けていました。

下に掲載した写真は羅城門ではなく、平城宮跡に復元された**朱雀門**です。羅城門の写真がないので朱雀門の写真にしていますが、それにしても「デカイ」し、荘厳です。中国の長安城のものは石で堅固に固められた城壁・城門でしたが、日本のものは木製で屋根には瓦がのせられています。



平城宮跡に復元された朱雀門（ウィキペディアより）

ここで、あなたに質問です。

次の写真は京都市平安京創生館の平安京模型で、中央に写っている道路が朱雀大路です。宮城（平安宮）の南にある朱雀門からまっすぐに羅城門まで延びています。この道路の幅はどのくらいあったでしょう？これも三択でいきますよ。

①約40m

②約60m

③約80m



京都市平安京創生館の平安京模型

でかすぎる朱雀大路

桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』の記述に基づいて、朱雀大路について確認してみましょう。

・・・今問題としたいのは、平安京の南端にだけ羅城を設けた事実の方である。申し訳程度に造ったこの羅城には、実用性がない。羅城門にも、門としての実用性がない（門を通らずとも、北・東・西から自由に京内に入出りできるのだから）。実用品でないならば、それらは装飾品である。羅城門だけではない。その両脇に東西二町×南北四町の計八町という宏大な寺地を占める東寺・西寺も、その立地から見て、羅城門とともに京の正面を飾る機能が期待されたと考えられている。装飾品とは、見るため・見せるためのものだ。では誰に、何のためにそれを見せるのか。

さらに、桃崎有一郎氏は付け加えて、次のように問います。

朱雀大路の奇妙な性質をさらに掘り下げよう。最もわかりやすく、かつ最大の謎は、道幅である。・・・『延喜式』では・・・「朱雀大路、広さ二十八丈・・・大路、広さ十丈・・・小路、広さ四丈」とある。朱雀大路には、一般的な幅十丈の3倍近い二十八丈、つまり82mもの幅があった。

先ほどの質問の答えは、③で、なんと82mもの幅があったんですね。「はちじゅうにめーとる」！！と思わず、声が上ずってしまいます。

平城京の朱雀大路の道幅はどのくらいあったのでしょうか？なんと、こちらでも約74mもあります。とっても大きいですね。奈良の**国営平城宮跡歴史公園**（1998年に復元）には平城宮の朱雀門やその門前に幅74～75mの平城京朱雀大路が再現されています。行ったことのある人は、朱雀門や朱雀大路の大きさにびっくりしたのではないのでしょうか？

ただ、日常生活を送っていて82mもの道幅というのは、全く経験しないので、距離感がはっきりしません。そこで、桃崎有一郎氏の著書から抜粋しましょう。

同じ幅を体感したければ、東京駅丸の内口（東京駅中央口交差点）と皇居（和田倉門交差点）をむすぶ全長190mの「行幸通り」へ行くとよい。8車線の車道と歩道、それらに挟まれた幅30mの中央帯をすべてを合わせた幅が73mで、平城京の朱雀大路とほぼ同じである。

また、京都では堀川通の、今出川通との交差点のすぐ南側が、両側の歩道も含めて（東寄りを流れる堀川を除いて）約40m幅で、その2倍が平安京の朱雀大路の幅である。

上の記述で、平城京や平安京の朱雀大路の大きさを想像できましたか？

よくわからないですか？それでは、鉄道の駅でたとえると、どうでしょうか？

JR京都駅で確認しましょう。京都駅の最も北側1階に中央口がありますが、その改札口からどこまでいけば平安京の朱雀大路の幅に該当するでしょうか？下記の三択で選んでください。

①5番線（東海道線、京都線） ②8番線（奈良線） ③10番線（奈良線） ④新幹線乗り場

JR東京駅ではどうでしょうか？ 西側の一番線から考えましょう。

①5番線（山手線外回り） ②8番線（上野東京ライン） ③10番線（東海道線）

それでは、正解です。

京都駅の場合は、③の一番南側の奈良線までが、約90mあります。

JR東京駅の場合も、③が正解です。東側の10番線（東海道線）までが約90mになります。

両方とも、新幹線を除いた在来線のプラットフォーム全体の幅が約90mなんですね。

私は京都に住んでいますので、東京駅のことはよくわかりませんが、京都駅ならばよくわかります。いわば、京都駅の南の端から北の端までのプラットフォームほぼ全部ということなので、けっこう大きいですね。いつもは人混みが凄いですから、北から南まで行くのに時間がかかります。

では、道路ではどんな感じでしょうか？

道路で言えば、・・・一般的な大路でさえ、現代の国道一号線の最も車線が多い区間（9～10車線）の道路に等しいのであり、その3倍の幅となると、もはや使いにくいというレベルを超えている。（一車線3.25m幅の都市部の幹線道路を朱雀大路に並べると、だいたい25車線になる）

なお、かつての朱雀大路の位置をおおよそ踏襲する千本通・・・（左右の歩道と5車線）と、それに面する立命館大学朱雀キャンパスの建物の幅をすべて足すと、ちょうど82mほどになり、朱雀大路とほぼ同じになる。・・・・・・・・

平安京の人口は10万～12万程度と推定されるが、平安京がどれだけの人口を抱えていようと、人や馬車が通うのにそれだけの道路幅が必要はなすがない。その幅は不必要どころか、実用面では有害とさえいってよい。

さきほど、桃崎有一郎氏は「誰に、何のためにそれを見せるのか」と問いを出していました。

外交の舞台＝鴻臚館

羅城門は朱雀大路の入り口なので、その左右に広がる装飾的な羅城や朱雀大路を通行人に見せるためにある、ということですよ。

実は、朱雀大路は、建前上、人が立ち入らない（立ち入ってはいけない）道でした。ここに矛盾が生じます。

朱雀大路はあくまで道路です。道路は、誰かが通ることを想定して造られます。ところが、朱雀大路には、普段は人が立ち入らないし、生活道路でもありません。

とするならば、このただ広い道路は、特別な時に、特別な誰かが、立ち入るための道路ということですね。一般人の生活以外の目的で使われる道路なのでした。

では、誰が、いつ、なんのために、使うのでしょうか？

そういう観点から朱雀大路の沿道を見てみると、七条大路との交差点の南側に位置する「**鴻臚館（こうろくかん）**」という建物があることに気づきます。ここは、最近、京都鉄道博物館となり、たくさん訪れる観光客のために「梅小路京都西」という駅までできました。

鴻臚館とは、外国の使節を滞在させ、接待する官庁です。では、**そこで接待される外国使節とは、具体的には誰のことなんでしょうか。**平安京が造営された頃、日本と深く関係を持った外国としては、唐・新羅・渤海があります。**下記から三択で1つを選んでください。**

①唐使

②新羅使

③渤海使

まず、唐との関係では、日本から唐に派遣する遣唐使が寛平六年（894）に廃止されています（ちょうど平安遷都一〇〇年）。「道真が 白紙に返す 遣唐使」と覚えませんでしたか？

唐人の入京は、天長十一年（834）が最後で、遣唐使廃止の60年も前です。そして正式な使節である唐使の入京となると、さらに、その50年も前の宝亀十一年（780）が最後でした。

その頃はまだ奈良時代ですから、都は平城京です。つまり、**唐使が平安京を訪れたことはなく、もちろん鴻臚館を使ったこともないのです。**

次に、新羅との関係では、天平九年（737）に、日本から新羅に派遣される遣新羅使（けんしらぎし）が聖武天皇に対して「新羅が日本に服属の礼を取らない」と奏上する出来事がありました。それ以

来、日本からは定期的な遣新羅使が送られなくなり、また新羅からの使節は大宰府から追い返す方針となりました。新羅使が最後に都に入ったのは、奇しくも唐使が最後に来日したのと同じ宝亀十一年で、やはり奈良時代です。

ですから、**新羅使も、平安京の鴻臚館には足を踏み入れていないのです**。また935年（日本の承平五年）に新羅を併合した高麗の国使も、平安京まで至った形跡がありません。

最後の渤海についてですが、渤海の使節が鴻臚館に滞在した記録は豊富にあります。渤海は、日本海を挟んで日本と向かい合う、靺鞨（まつかつ）人が建てた国です。日本から派遣される遣渤海使（けんぽっかいし）は弘仁二年（811）を最後に途絶えましたが、**渤海から派遣される渤海使の来朝は33度を数え**、延喜二〇年（920）まで平安京の鴻臚館で歓待された記録があります。

渤海が契丹（きったん）に併合されて滅亡するのは926年（日本の延長四年）なので、まさに渤海の滅亡寸前まで国交が維持され、鴻臚館も活用されていたことになります。

このように、**鴻臚館を実際に用いたのも、そして用いる可能性があったのも、渤海使のみでした**。したがって、**正解は③です**。

鴻臚館も、鴻臚館が面する朱雀大路も、事実上は渤海使が来日した時のために造られた施設だったんですね。渤海使は来日すると、この鴻臚館に宿泊・滞在し、天皇に国書を伝達したそうです。

渤海使をねぎらう饗宴は大内裏の**豊楽殿（ぶらくでん）**で行われましたから、渤海使は鴻臚館から大内裏まで、両者をむすぶ最短の街路＝朱雀大路を北上したのでしょう。また、入京時にも鴻臚館まで、朱雀大路を北上したことでしょう。



京都市平安京創生館の平安京豊楽殿模型

というわけで、桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』では、どのようにまとめられているのでしょうか、チェックしてみましょう。

朱雀大路は、主に外交使節という特別な人物によって通行され、観察される街路であった。その入り口の羅城門とその脇に延びる羅城（垣）も、そのための装飾であった。古今東西を問わず、外交では相手に足元を見られぬよう、威厳を保たねばならない。

特に重要なのは、当時の日本が抱いた世界観である。日本の律令国家は天平一〇年（738）までに、唐を対等な「隣国」とし、新羅などその他の国は「蛮国（ばんこく）」という、一段下等な野蛮人の国と見なす国家観を身につけた。それは華夷（かい）思想（中華思想）という世界観、つまり唐が自らを「中華」（世界の中心の、最も素晴らしい国）と位置づけ、周辺諸国をすべて「諸蕃（しょばん）」（野蛮な諸国・諸民族）と見なした世界観の模倣であった。

唐は、戦争による制圧や、冊封（さくほう）・婚姻・羈縻（きび）政策などの外交を駆使して、それら諸蕃と緩やかな主従関係を結び、ユーラシア大陸のかなりの部分を占める、世界規模の帝国を維持した。冊封とは、現地の王を唐の皇帝が改めて王に任命することで、相手国の事実上の独立を認めながら、形式上で唐に従属させる手法で、主に東アジアに対して用いられた。朝鮮半島では新羅以来がそうであり、日本でも足利義満が明の成祖（永楽帝）から「日本国王」に冊封されたことがある。羈縻政策は、これも現地の王の支配を追認しつつ唐の地方官に任命し、都督府（ととくふ）や都護府（とごふ）などの唐の統治機関を現地において、間接的に支配する手法で、突厥（とっけつ）など北方・西方の諸蕃に用いられた。また冊封もせず、都督府なども置かず、皇帝の娘が諸蕃の王に嫁いで婚姻関係を結ぶことで、擬似的な親子関係を設定するにとどまることもあった。日本は律令国家を創立するにあたり、律令とともに、律令制の根底を成した右の華夷思想的な世界観も輸入した。ただ、さすがに律令制の本来である超大国・唐を、日本が「諸蕃」として見下すことは論理的に困難なので、「隣国」という対等の概念を考え出して、唐だけを特別扱いし、残るすべての国を「諸蕃」とした。日本の世界観では、日本は唐と並び、世界でただ2つのリーダーであった。・・・特に、神亀四年（727）に渤海使が入京して以来、日本は彼らを蕃国の朝貢者とみなし、渤海は取りたててその扱いに抵抗しなかった。そのため、渤海使の入京は日本の外交的主張を誇示する格好の場となった。

うーん、日本は唐と並ぶ力や文明を持つ「世界でただ2つのリーダー」の国と考えられていたんですか。誇大妄想のような気がしますが、当時の為政者たちはそのように考えて世界を捉えていたというのは驚きです。

そして、渤海使たちが通る平安京の中軸道路である朱雀大路は、雑多な人々が入り出したり、雑多な建物が視界に入らないよう、左右をひたすら続く垣で覆い隠し、圧倒的な規模と美観を保つことが求められていたのです。

東大入試問題

ところで、藤原京に関して東京大学の2018年度の入試問題で出題された「設問番号第1問」を紹介

しましょう。

中国の都城にならって営まれた日本古代の宮都は、藤原京（694～710年）にはじまるとされる。それまでの大王の王宮のあり方と比べて、藤原京ではどのような変化が起きたのか。律令制の確立過程における藤原京の歴史的意義にふれながら、解答用紙（イ）の欄に6行以内（180字）で説明しなさい。なお、解答には下に示した語句を一度は用い、使用した語句には必ず下線を引きなさい。

官僚制

条坊制

大王宮

大極殿

問われているのは、それまでの大王の王宮のあり方と比べて、藤原京ではどのような変化が起きたのか、ということです。そして、律令制の確立過程における藤原京の歴史的意義にふれることが条件づけられています。

『詳説日本史B』（山川出版社）のP40の脚注には次のような記述があります。

藤原京は、それまでの一代ごとの大王宮とは違って、三代の天皇の都となり、宮の周囲には条坊制をもつ京が設けられて、有力な王族や中央豪族がそこに集住させられた。そして国家の重要な政務・儀式の場として、中国にならった瓦葺で礎石建ちの大極殿・朝堂院がつくられるなど、新しい中央集権国家を象徴する首都となった。



駿台予備学校日本史科講師の塚原哲也先生の解答例を以下に紹介します。以前にも、何度か紹介させて頂いていますが、塚原哲也先生は、私の師匠ともいうべき方で、何度も教師対象の研修会に参加させて頂いています。『東大の日本史27カ年 [第6版]（難関校過去問シリーズ）』（教学社）や『日本史の論点：論述力を鍛えるトピック60（駿台受験シリーズ）』（駿台文庫）の著者であり、また『つかはらの日本史工房』というHPも開設しておられます。以下の解答は、『つかはらの日本史工房』にアップされている内容です。

それまでの大王宮は代替わりごとに移った上、朝廷の職務は有力な王族や中央有力豪族の邸宅に分散していた。それに対して藤原京は、天皇の住む宮のなかに政務や儀式を行う大極殿・朝堂院、朝廷の職務を担う官庁を設けると共に、宮の周囲に条坊制に基づく京を設けて王族や豪族らを集住させ、三代の

天皇の宮都とされた。こうして藤原京は、氏族制から官僚制への転換を推進する意義をもった。(180字)

(別解) それまでの大王宮は代替わりごとに移ったうえ、さまざまな職務は有力な王族や中央有力豪族の邸宅に分散していた。それに対して藤原京は、天皇の住む宮城のなかに政務や儀式を行う朝堂院・大極殿、さまざまな職務を担う官庁を整えるとともに、宮城の周囲に条坊制に基づく京を設けて王族や豪族らを集住させた。そして三代の天皇の宮都とされ、藤原京は官僚制の整備を推進する意義をもった。(180字)



もう一人、私の師匠とも言うべき先生、[野澤道生先生](#)の解答例も紹介しましょう。野澤先生は愛媛県松山西中等教育学校の教諭で、『東大入試で学ぶ日本史』というテーマで土曜市民講座を主催しておられます。また、それをもとにした『教科書一冊で解ける東大日本史』(光文社新書)や『やり直し高校日本史』(ちくま書房)の著者であり、『[野澤道生の「日本史ノート」解説](#)』という名前のホームページを開設しておられます。以下の回答は、『野澤道生の「日本史ノート」解説』にアップされている内容です。

それまでは一代ごとの大王宮がつくられ、有力な王族や中央豪族は各邸宅で政務を行っていた。それに対して藤原京は中国にならい、宮の周囲に条坊制をもつ京が設けられた本格的な都城として造営された。官僚制によって官吏となった有力な王族や中央豪族は集住させられて、政務は重要政務や儀式の場である大極殿・朝堂院などでとるようになり、藤原京は律令制を確立するための首都となった。(180字)

さあ、どうでしたか。東京大学の日本史の問題はなかなか歯ごたえのある問題ですよ。でも、たいていは教科書で答えられる良問です。

さて、平安京の構造は、天皇の権威や尊さ、つまり天皇の威信を物体化・視覚化させたものです。**平安京の本質は「威信財」**なんですね。ちなみに、威信財とは、所有者の威信を他者に見せつけることを最大の役割とする財産のことです。したがって、実用性は二の次、重視されません。

次号に続く